



TITLE:

<雜錄>漢口通信

AUTHOR(S):

日比野, 丈夫

CITATION:

日比野, 丈夫. <雜錄>漢口通信. 東洋史研究 1940, 5(4): 259-311

ISSUE DATE:

1940-06-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/145698>

RIGHT:

て使用さるゝことゝなつた。總て商業の流行、特に貨幣經濟の侵潤、商人階級の擡頭は、貝偏を有する貼、若くは賁字を生じ、之を以て商業、商人を意味する文字として用ひたが、字形の相類するより賁と混同され、遂には賁字が廢して賈字のみ専ら使用さるゝに至つたものである。賈字が一形にして二音二義を有するは、原義の延伸せるに非ずして、それが賁字を合併せし結果によるものであらう。

漢 口 通 信

日 比 野 丈 夫

○七日漢口着、一週間滞在。今日は武昌に泊ります。武漢三鎮大概の所は見えて廻りました。かつて松浦嘉三郎氏も訪ねて行かれた武漢第一の物知りといふ程明超先生（今は政府の參議）に逢つて色々話をきゝました。熊會貞さんの死に就いても今まで知らなかつた不思議な話を知りました。心配してゐた「水經注疏」も果して行方は知れず、おそろく重慶へ行つてゐるだらうとの事でした。楊守敬の故宅も殆ど破壊されてゐる様です。（三月十四日武昌にて）

〔編者附記〕熊會員は楊守敬のコレボレーターで楊氏の歴史地理方面の研究は熊氏の援助に俟つ所が少くない。楊氏の死後は専ら「水經注疏」の完成に専心してゐた。

詳しくは東方學報京都第七冊所載松浦氏「熊岡之翁の追憶」参照。

○船で岳州へ参りました。町の荒れてゐるには困りましたが岳陽樓や呂仙亭なども一通り觀ることができました。二泊して今朝岳州から引返し蒲圻に來ました。山ばかりの間を通過つて始めて稍々廣い盆地となります。驛から町まで少し路程がありますが實に景色がよく大原や鞍馬あたりを髣髴させます。低い城壁の西と北を取巻いて陸水の流があり東と南には山が迫つてゐます。城内には之と言つて見るべきものありませんがこの緑の山と青い水はいつまでも忘れられぬでせう。（三月二十二日 蒲圻にて）

ふ人もあるかも知れない。尤もさうなれば著者の役割は單なる良き翻譯者といふことになつて了ふが。

いづれにしても數多い東洋史學徒の中で史學史や史學理論の

研究家の少いのを嘲つてゐる今日、金井氏の如き有力な研究家の出たことは誠に喜ばしいことと言はねばならない。

〔内藤戊申〕

漢 口 通 信 (續)

日 比 野 丈 夫

○蒲圻から歸つて漢口で二日休息し昨日早朝軍用車に便乗させて貰ひ信陽までやつて参りました。勿論貨物列車で、十一時間程かかりました。信陽の町は思つた程特徴のある所ではありませんが西と南の城壁に沿つて潁河の流がありそれを隔てゝ峻しい山がめぐつてゐます。

縣政府に泊めて貰ひました。北郊の子貢の祠へ行つてみました。此處は子貢の宰たりし所、古の申伯の國です。西北五里半許の游河鎮の古墳から昨年相當量の古銅器や石器土器等が偶然發見された由。銅器には仲々立派なものもあつたとの事です。(三月二十六日 信陽にて)

〔編者附記〕 游河鎮は淮河の上流域にあるが、その下流

の岡始や壽州からは既に西洋人の淮河式と呼び支那人の楚器と稱する一群の銅器が出土してゐるから、この出土物も或は類を同じうするものと思はれる。詳報を鶴首する。

○今朝早く信陽を發つて十時頃新店で下車し雞公山に登りました。相當の急坂です。「青分楚豫。氣壓嵩衡」といふ刻石があります。正に河南湖北兩省の境界で高さ八〇〇メートル許りだそうです。奇巖あらはれ雞公頭小雞公頭等の名がついてゐます。すべて花崗岩ですから水は非常にきれいです。(三月二十七日 雞公山にて)